

地域に根付いた文学賞で まちの活性化



きよはら けいこ
清原 慶子
みたか
三鷹市長(東京都)



やなぎだ たけひこ
柳田 剛彦
こもろ
小諸市長(長野県)



すずき かずお
鈴木 和夫
しらかわ
白河市長(福島県)



うへだ どういち
上田 東一
はなまき
花巻市長(岩手県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ

細野 助博

中央大学総合政策学部教授

地域ゆかりの作家の功績をた
たえるとともに都市の認知度や
ブランド力の向上などを目的と
して、自治体主催の文学賞が多
数創設されています。若者の文
字離れ、文学離れが指摘される
中、地域文化に果たす役割と期
待は多大なものがあります。

座談会では地域に根付いた文
学賞を活用し、まちの活性化に
貢献する上田・花巻市長、鈴木・
白河市長、柳田・小諸市長、清原・
三鷹市長にご出席いただき、文
学賞創設の背景やメリット、ま
ちづくりや教育面への波及効果
などについてお話しいただきま
した。

(本文中の役職名・敬称は一部省
略しています)

宮沢賢治賞・イーハトーブ賞は
地域に根付いた、
独自の精神性を継承する
役割も期待されている
と思います。



上田 東一
花巻市長(岩手県)

文学賞創設の経緯とその特徴

細野 新人作家の発掘はもちろんのこと、地域の文化振興や都市の認知度向上を目指して地方自治体主催の文学賞が数多く生まれています。本日は、地域ゆかりの作家を冠にした文学賞を設け、地域活性化に向けて取り組む都市の市長にお集まりいただきました。

まずは各都市で文学賞を創設した経緯やその

特徴などについてお聞かせいただきたいと思いをします。

上田 ご存じの通り、花巻市は宮沢賢治が生まれ、その生涯のほとんどの時期を過ごした地。没後80年を経ても、市内ではさまざまな団体が賢治作品の朗読活動を行ったり、演劇活動を展開するなど、今でも賢治の影響が色濃く残っています。

そんな花巻市で、「宮沢賢治賞・イーハトーブ賞」が創設されたのは平成3年のこと。昭和63年から平成元年にかけて竹下政権下で実施された、各市町村に1億円を交付する「ふるさと創生事業」がきっかけです。この交付金を活用して、ハード整備などを進めた自治体も多数ありましたが、花巻市では市民を含む、さまざまな活動の実践者や芸術家を顕彰したい。そして、農業、思想、文化などに対する市民の意識を高揚したい。その思いから、賢治ゆかりの賞を設けることにしたわけです。

この賞はその名称の通り、過去3年間にわたる、賢治に関する研究・評論・創作などに贈られる「宮沢賢治賞」と、賢治の精神を受け継いだ、やはり過去3年間にわたる、実践的な活動に対して贈られる「イーハトーブ賞」の2つの賞で構成されます。いずれも賢治に関する全国の研究者などで構成される「宮沢賢治学会」のメンバーによる選考を経て、毎年、賢治の命日の翌日の9月22日に表彰式を開催。同時に、多くの市民が見守る中、受賞者には講演をしていただいています。

鈴木 「孤高の文士」「最後の文士」などとも呼ばれた、歴史文学作家の中山義秀は、旧大信村(現在の白河市)で誕生しました。実際、この地で過ごしたのは小学校1、2年生ぐらいまでとい

われていますが、中山義秀は終生、この生まれ故郷を自分の人生の原点と位置付け、大切に思っていたようです。

そうした縁を生かして、旧大信村では中山義秀を生んだこの地に文化の香りを根付かせようと、平成5年に中山義秀記念文学館を建設。併せて、同年から中山義秀顕彰会が主催、村と文学館の共催で、歴史小説・時代小説を対象にした「中山義秀文学賞」が設けられました。平成17年の旧大信村と白河市の合併後は、新白河市がこの事業を引き継いでいます。

この文学賞には極めてユニークな点があります。それは、日本で唯一、最終選考会を広く公開していることです。選考委員の先生方の厳しい評価、激しい言葉の応酬を直に拝見できるとあって、大いに注目を集めています。

今ではすっかり日本を代表する歴史文学賞として、歴史文学作家の登竜門とまでいわれるほどに発展しました。今年には記念すべき第20回目。歴代の受賞者に集まっていたいただき、交流会を開催する予定です。

柳田 小諸市は明治の文豪・島崎藤村とゆかりが深いまちです。明治32年、27歳の藤村は、恩師木村熊二の招きに応じ、市内の旧制中学校「小諸義塾」(設立時は私塾)へ赴任。これが機縁となりました。



既に処女詩集「若菜集」を発表し、新進気鋭のロマン派の詩人として高く評価されていました。が、以来、国語・英語の教師として6年を過ごし、向学心に燃える多くの若者たちに多大な影響を与えました。実は私の祖父もその一人で、藤村から徒然草の授業を受けたと、子どものころに祖父から直接聞いた覚えがあります。

藤村にとっても、この小諸という地は創作意欲を大いに刺激したようで、赴任時代の明治34年に『落梅集』を刊行。市内の懐古園から見た風景をうたった「千曲川旅情の歌」「小諸なる古城のほどり」などの作品を発表しています。

こうした縁から、小諸市では藤村の没後50年、生誕120年を記念して、平成4年に「小諸・藤村文学賞」を創設しました。垣根を低くして、誰もが応募しやすいようにと、エッセイを対象とした文学賞です。

回を重ねるごとに、応募数の減少に悩まされる文学賞も少なくないようですが、昨年度、第20回の応募数は2728編。前年度よりも300点余り増加するなど、ありがたいことに年々応募数は増え続けています。海外から多数の応募があるのも特徴の一つです。

清原 太宰治は昭和14年9月から三鷹町に転居して以来、戦時中の疎開時代を除き、昭和23年6月に亡くなるまで、三鷹の地で暮らしました。三鷹を舞台にした作品も数多く残っています。

この太宰治に関しては、既に昭和39年に小説の公募新人賞として筑摩書房が「太宰治賞」を創設しており、三鷹市民でもあった故吉村昭さんをはじめ、多くの作家を世に送り出しましたが、経営上の事情もあり、昭和53年の第14回を最後に、中断を余儀なくされていました。

それから20年ほどたって、太宰治賞の復活を同社に呼び掛けたのが三鷹市でした。太宰治賞を通じて、三鷹市ゆかりの文人たちの文化の薫りを継承したいという思いからです。この申し出が受け入れられて、太宰治の没後50年にあたる平成10年、三鷹市が市制施行50周年を迎える平成12年を前に、共同主催の形で復活することになりました。以来、第140回芥川賞を受賞

大事なことは文化力と
産業力のバランス。
文化資源を掘り起こして、
新しい地域づくりを進めたい。



鈴木 和夫
白河市長(福島県)

した津村記久子さん(第21回受賞)、第24回三島由紀夫賞を受賞した今村夏子さん(第26回受賞)、第8回大江健三郎賞を受賞した岩城けいさん(第29回受賞)など、多数の実力派作家を輩出しています。

応募作品数も、「小諸・藤村文学賞」まではいきませんが、復活した第15回が1623編。以来、現在までほとんど1000編以上の応募があります。

ちなみに、これらの多数の応募作品の中からしっかりと実力作を選考できるのも、そして受賞作品などが掲載されたムック本を毎年刊行できるのも、筑摩書房が総力を挙げて取り組んでくださるからにはかなりません。出版社との共同主催のメリットを強く感じています。

文学賞は地域に何をもちたらずか

細野 各都市でいかに文学賞が地域に根付いているか、その実態がよく分かりました。では、次に文学賞が果たす役割、地域に与えるメリットなどについてお聞かせいただきたいと思っています。

鈴木 市長に就任して、もうすぐ8年になりますが、つくづく感じるのは、市民は意外と地域の歴史文化を知らないということ。事実、白河は戊辰戦争で政府軍と戦い、10000人もの死傷者を出した地域ですが、この歴史的事実を学校ではまったく教えてきませんでした。

その点、フランスは地域の歴史を大事にしています。昨年、姉妹都市締結25周年を記念して、フランスのコンピエーニュ市を訪れたのですが、市長さんは「わがコンピエーニュはローマ時代から…」と誇りを持って話されていました。

いずれにせよ、自分たちの根っこは、地域の

歴史文化にあるわけですから、それを掘り起こすことが不可欠。その手段の一つが文字の力、文学の力だと考えています。

柳田 意外と市民はまちのことを知っているようで深くは知っていないようです。そのことは私も実感しています。だからこそまちの歴史やその魅力を、文学賞で喚起することは大事なことだと思っています。特に、地域の若者たちには、足元の歴史文化をよく理解してほしいと思っていますが、残念ながら近年は、市内の中高生の応募が少なくなっています。ここが課題です。

清原 三鷹市は、太宰治が家族と暮らし、魅力的な作品を多数生み出したまちです。市内の禅林寺にはお墓もありますし、太宰が実際に歩いた鉄道の跨線橋をはじめ、太宰ゆかりの場所も数多く残っています。実際にその足跡を辿ることもできるわけで、これこそ、三鷹市において掛け替えのない財産だと考えています。

その観点から、2008年3月、太宰の没後60年、生誕100年を記念して、太宰が通った伊勢元酒店跡に「太宰治文学サロン」を設置し、毎年1万人を超すお客さまが来訪されています。そして、長年にわたり太宰治ゆかりの地の観光ガイドを実践してきた市民団体との協働で、ここを拠点に太宰ゆかりの場所をご案内するガイド養成と実践の取り組みを進めるなど、「都市観光振興」にも力を入れています。

上田 宮沢賢治、中山義秀、太宰治はいずれも東北出身。島崎藤村も、若き日に花巻出身の佐藤輔子という女性に恋をしていて、まったく東北、そして花巻と縁がないわけでもありません。最近、梅原猛さんも強調されていますが、東北には文学の豊かな土壌があると思うのです。

課題は受賞者、
応募者との継続的な
交流の仕組みづくり。
そのための仕掛けを
新たにつくっていきたい。



柳田 剛彦
小諸市長(長野県)

では、それを支えているものは何かというと、独自の「精神風土」ではないかと私は考えます。実際、佐藤輔子の異母兄の佐藤昌介はやがて北海道大学の初代総長を務めますが、非常に義侠心に富んだ人物で、アメリカに留学中、明治政府に掛け合って、生活に困窮していた後輩の新渡戸稲造を懸命に支援しています。このような行動力、精神風土は賢治などにも通じるものがあります。宮沢賢治賞・イーハトーブ賞は、こうした地域に根付いた、独自の精神性を継承する役割も期待されていると思います。

具体的な地域づくりにも貢献

細野 具体的に文学賞がどのようにまちづくりに貢献しているか。その点に話題を移したいと思います。お話を聞きまして、特に印象的だったのは、都心に近い三鷹市から「都市観光振興」という新しい発想が出てきたこと。その経緯について、詳しくお聞かせいただけますか。

清原 率直に申し上げて、私が市長に就任するまで、いわゆる観光地ではない三鷹市では「観光」にはあまり積極的な取り組みがなく、観光協会もなかったのです。けれども、市長就任後、私は商工会等によびかけて研究会をつくり「都市観光」について検討していただいて、太宰治文学サロンを設置する前年に市と多くの団体が協働して「NPO法人みたか都市観光協会」を設立していました。そして、改めて住宅都市である三鷹市内の観光資源として、太宰ゆかりの場所以外にも、国立天文台、三鷹市立アニメーション美術館、山本有三記念館など、魅力的な資源が数多く集積していることを再確認して都市観光振興の取り組みを開始していました。そして、太宰治文学サロン開設以来、観光ガイドの育成、観光関連情報の収集・提供事業、各種イベント事業、講座の開催など「都市観光振興」に積極的に取り組んできました。

上田 花巻市でも、賢治を核に文化振興を進めながら、交流人口の拡大を図ろうと、平成24年度に市役所内に「賢治まちづくり課」を設置。賢治情報を二元的に管理し、情報発信する総合窓口機能を担うとともに、賢治に関する団体などとの連絡調整や協働による事業実施を進めています。併せて、平成22年度には、有識者や宮沢賢治



清原 慶子
三鷹市長(東京都)

太宰治賞をきっかけに、
観光振興を含め幅広く
取り組みを推進。多くの人に
「太宰治が生きたまち三鷹」
を実感していただきたい。

をテーマに活動を行う方々で構成する「賢治のまちづくり委員会」が発足。現在、官民一体となって、芸術フェスティバル「賢治風のステージ」や、賢治の創作の根底にある叙情性を主題にした「賢治メルヘンアニメフェスティバル事業」など、賢治ゆかりのイベントを展開したり、その足跡を観光資源に生かしたりと、活性化に向けた取り組みを推進しています。

柳田 「小諸・藤村文学賞」の所管は教育委員会生涯学習課ですから、なかなか観光や地域振興に結び付かない面がありますが、授賞式には、必ず全国から受賞者をお招きすることになっています。中高生が受賞される場合は、おおむね保護者が付いてこられますし、成人の場合でもご家族で参加されるケースが少なくありません。少なからず活性化に結び付いているのではないかと思います。

課題を挙げるとすれば受賞者、応募者との継続的な交流の仕組みをつくることです。中にはリピーターとして何度も本市を訪れる受賞者も少なくないようですが、残念なことにわれわれ行政と接点がないんですよ。もっと絆を深めて、教育委員会にもどんだん顔を出していただきたいし、そのための仕掛けを新たにしていきたいと考えています。

上田 受賞者との交流は非常に重要です。今年JR釜石線にて、賢治の「銀河鉄道の夜」の世界観をイメージした「SL銀河」が運行し、人気を博していますが、この車内のコンテンツプログラムをデユースをされたのが、第18回宮沢賢治賞受賞者で、オーストラリアの作家のロジャー・バルバーズさん。こうした具体的なつながりが出てきていること自体、大きな成果だと考えています。

鈴木 長らく外交官として活躍した、前文化庁長官の近藤誠一さんは、白河市を訪れて「これからの外交力は地域文化の力」と力説されました。振り返れば日本は戦後以来、ひたすら経済成長を旗印に突き進んできました。地方も産業力を重視し、企業誘致に力を入れてきたわけですが、今後このスタンスでいいのかどうか。今や私たちは分水嶺に立っているように思います。



大事なことは文化力と産業力のバランス。両方が相まってこそ地域の永続性は図られると思いますが、現状では文化力が少々弱い。文化資源を掘り起こして、新しい地域づくりを進めなければいけないと思います。

清原 そのためにも、地域の皆様の理解は欠かせません。実際、文学賞に関しても、運営するには一定の予算が必要ですから、継続するには市民や議会の理解が不可欠です。そうした意味でも、前市長時代に復活した「太宰治賞」をどう継続していくか、活かしていくか。これは文学賞を引き継いだ市長として大きな課題でありましたが、市長就任後に太宰治賞ゆかりの講師による「文学講演会」の開催を始めるとともに、太宰治文学サロンの設置をするなど、文学賞と連携した文化振興の取り組みを進めることによって、都市観光振興に広げることができています。さらに、障がい者の就労支援施設では、三鷹産のキウイフルーツや桜桃を使った太宰治のロゴ入りクッキーを生産するなどをはじめ、マグカップ、ボールペンやTシャツなどの太宰治グッズの展開もあり、文化と産業を結びつけた取り組みも行われています。

こうした施策を総合的に進めながら、市内外の皆様に「太宰治が生きたまち・三鷹市」



細野 助博
(中央大学総合政策学部教授)

を再確認し、実感していただき、市民の皆様の地域への愛着や誇りを高めるとともに、市外の方々にも三鷹市の都市としての価値や品格を感じていただきたいと考えています。

子どもの文字離れを食い止めるために

細野 現在、若者の文字離れ、文学離れが進んでいます。この傾向をいかに食い止めるか。教育行政においても重要な課題でしょうが、文学賞やそれにまつわる活動がどのような効果を発揮しているか、お話しください。

清原 太宰治の作品は中学校の教科書にも掲載されていますし、三鷹市では実際に太宰治のゆかりの場所を辿ることが出来ます。こうした環境は中学生をはじめ、三鷹市の子どもたちを大いに触発し、教員にも太宰治作品に関する授業の充実をもたらしていると思います。たとえば、中学生を対象にした、全国納税貯蓄組合総連合会による「税についての作文」についても、周辺の都市に比べて三鷹市の応募数が増えています。さらに、以前は俳句といえは、円熟した中年以降の世代の趣味とされてきましたが、私が、芸術文化協会に若い世代の芸術文化への参加を促す活動をお願いしたところ、三鷹市俳句協会

では小学生を中心に「ジュニア俳句」を公募してくださり、毎年、子どもたちから涙が出るほど感動的で素敵な作品が集まるようになりました。せっかく文学賞を設けている都市なのです。から、今後も教育委員会と連携して、子どもたちに対して、積極的に言葉や文学に親しむ環境を提供していきたいです。

柳田 俳人の高浜虚子は戦中から戦後に掛けて、本市に疎開されていたこともあり、今でも俳句が盛んで、毎年、「虚子・こもろ全国俳句大会」を開催しています。ただ、「小諸・藤村文学賞」と同様に、地域の子どもたちの応募は多くありません。文字離れ、文学離れを食い止めるためにも、市内からの応募数を増やしたいと考えています。

上田 花巻市では、賢治に関する活動が、官民ともに活発に展開されている影響で、子どもたちの文学に対する関心は高まっていると思います。さらに、市では地元の富士大学と連携して、「賢治のまちから全国高校生童話大賞」も実施しています。全国の高校生の豊かな創造力とみずみずしい感性を引き出す機会を提供することを目的にした文学賞ですが、地域の高校生にも積極的に応募してもらいたいです。

鈴木 東日本大震災を経て、明らかに市内の子どもたちは変わっています。実際に相対して、言葉を交わしてみても、自分たちで地域を何とかしないといけないという意識が高まっているのが分かります。この中からすごい大人が出るかもしれない。私はそういう期待を持っています。

中山義秀は、時代の移り変わりが激しいときこそ、歴史を勉強すべきと強調していますが、

足元の歴史をしっかりと学んで、未来に羽ばたいてもらいたいと考えています。

細野 各市長から文学賞が果たす多面的な効果、役割についてお話しいただきました。実際、文学賞というと新人作家の発掘という側面ばかりが強調されますが、地域の足元の歴史を発掘し、それを地域が発信する。そのことで市民の誇りが生まれ、かつ都市の品格も高まってくる。各都市において、そうした相乗効果が生まれていることをよく理解できました。

大都市への一極集中の弊害が指摘されていますが、今後も市民とともに文学賞を生かした活性化の取り組みを進め、各都市がこれまで以上に発展されることを願っています。本日はどうもありがとうございました。

(平成26年7月9日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は1月号に掲載予定です。



